

## 令和4年度第4回（第11期第7回）さいたま市社会教育委員会議 会議録

○開催日時：令和5年3月14日（火）10時00分～11時30分

○開催場所：別館2階 第4委員会室

○出席者名：【委員】若原 幸範議長、加藤 美幸副議長、石田 玲子委員、  
井上 久雄委員、小森谷 由紀江委員、佐藤 理恵委員、  
関根 公一委員、千明 勉委員、林 弘樹委員、  
溝口 景子委員、

【事務局】（生涯学習部） 山浦 麻紀  
（生涯学習振興課）辰市 健太郎、馬場 智哉、竹居 秀子、  
石田 悦子、伊藤 智美、清宮 雅貴  
（生涯学習総合センター）野口 みずほ  
（資料サービス課）水澤 祐子

○欠席者名：桑原 静委員、高山 俊介委員、塚元 夢野委員、  
吉川 洋一委員、亘理 史子委員

○公開・非公開の別：公開

○傍聴人の数：なし

### 1 開 会

### 2 挨 拶

### 3 議 事

#### (1) 報告事項 前回会議について

令和4年度第3回会議の概要について、会議録に基づき説明した。

#### (2) 協議事項 第11期さいたま市社会教育委員会議提言の骨子について

##### ア 提言の構成について

前回までの委員の意見を基に、「① 個人の学習成果がつながりづくり、まちづくりにつながり、地域社会の発展に生かされるための方策」について「a. 人材活用について」、「b. さいたま市の地域の魅力の活用について」、「c. 市民参加の経営について」、「② 市民と生涯学習提供者双方に生涯学習ビジョンを理解してもらうための方策」について「d. 生涯学習モデルケースの提示について」と「e. 学習活動の情報発信について」を計5つの方策として骨子をまとめたことを説明した。

#### 【意見・質疑応答】

<議長>

本日は前回までの会議を基に示された骨子案を基に、第2章の内容を深めていきたい。社会教育委員会議から市への提言という形のため、予算や担当部署等技術的な問

題は触れつつも、どのような思いや内容で提言していくかを主として自由な発想からご意見いただきたい。

まずは、改めて骨子案を確認した上で、5つの方策について掘り下げていこうと思う。

<副議長>

①ではa、b、cという3つの方策を示していただいた。

aは人材活用とあるが、生涯学習ビジョンは行政が人材を活用するだけでなく、市民とともに活動していくという意味合いを持っている。「活用」という言葉には一方的に使うというイメージがあるため、留意する必要がある。

また、ビジョンでは「人づくり」、「つながりづくり」、「まちづくり」の3つの点が示されおり、方策も同様に3つで示されている。aが「人づくり」、bが「まちづくり」、cが「つながりづくり」に対応していると思うが、現在の表現は関連やつながりが見えないためもう少し柔らかくわかりやすい表題となると良いと思う。

<議長>

表現には確かに改善の余地がある。特に「活用」という表現には、少々上から目線のような印象があるかもしれない。

また、表題にはビジョンの中で示されている「人づくり」、「つながりづくり」、「まちづくり」という要素を生かせるのではないかというご意見をいただいた。

<林委員>

全体の構成には賛成である。

ただ、やはり実際に生涯学習ビジョンを実現していくためには市民や、生涯学習に関わらない市長部局等の職員との連携が必要であることを主張したい。生涯学習ビジョンの目的には「人づくり」、「つながりづくり」、「まちづくり」とあるが、究極的にはやはり「まちづくり」に繋がると思う。一方で、地域も結局は人が基盤なので「人づくり」も大事であり、市民一人ひとりにとっては、この変化の時代をどう生き抜くか、どう豊かに暮らすかということも重要である。

そのため「人づくり」、「つながりづくり」、「まちづくり」という言葉を、目的に応じて使い分け、それぞれが並列ではなく循環している意識が重要と考える。

<議長>

生涯学習ビジョンは、策定の段階から最終的な目的をまちづくりとして、そこにこだわって作成してきた。その点は提言の中でもしっかりと伝えたい。

また、市の職員の方々には、(2)にもある生涯学習提供者が何を意味するかをしっかりと伝えていきたい。「まちづくり」のためには連携が必要であり、生涯学習がその一翼を担っているということを提言の中で明確にしたいと思う。

**イ 提言のテーマの中身について**

① 個人の学習成果がつながりづくり、まちづくりにつながり、地域社会の発展に生かされるための方策について

【意見・質疑応答】

<林委員>

①は、インプットからアウトプットに至る過程が重要な視点である。アウトプットの方法は多岐にわたり、各関連事業やイベント、コンテスト等で展開していることは素晴らしい。

一方で、生涯学習には多様性があり、例えば文化的なものやスポーツ等、発表の場も多種多様に分かれている。我々が目指すのは、アウトプットした結果を統合して、「まちづくり」の場の創出等に活かすことであり、最終的には参加者がわくわくしながら参加できるような場を創出し、その先にあるビジョンの実現につながることを求められる。それぞれの活動のアウトプットで終わらず、一步進んだ結果を得るための取組が必要であると思う。

<議長>

学習成果のアウトプットをバラバラのままではなく、地域のかとして統合していくことが、本当の「まちづくり」に繋がっていくという方向性も示せると良い。

<石田委員>

いただいた資料を改めて読むと、既に市で実施している取組も良いものが多いので、これらをどう連携させていくかが課題である。

国籍や世代、性別、障害の有無等を区切らず、誰でも参加できる機会を設けることが大きなテーマとなる。公民館で活動していても、様々な国の方が参加するような活動が不足しているように感じるので、既に実施している取組を活かしながら、様々な方が参加できる機会を増やすことが、「まちづくり」につながると考える。

<議長>

多様性というポイントについて、特に皆様のご意見を伺いたい。

国籍や世代、性別、障害の有無を超えて、誰でも参加できるようにすることは大切だが、具体的な実現方法が課題である。先日のワークショップでも、様々な属性を持つ方々の話題が出たが、講座等への参加のためのハードルが高く躊躇してしまうことがある。

そのような方々に対して、どのように支援していくか、ハードルを下げしていくか、生涯学習提供者の具体的な取組についてアイデアがあれば、お聞かせいただきたい。

<佐藤委員>

特に外国籍の方々に向け、誰もが参加できるチャンスがあると紹介できるものが欲しい。

自治体が外国の方向けに提供している情報やサービス等の多くはいわゆる「やさしい日本語」であり、英語等他言語で提供される情報は少なく感じる。

現在の技術であれば翻訳ツールや高性能なA I チャットボット等を活用すれば、他の言語で情報を提供することも可能なので、ご検討いただきたい。

<議長>

さいたま市の情報発信は、現在どのような状況か。

<事務局>

市のホームページでは重要なお知らせや市民にとって身近な手続き等は、英語版や中国語版等が各所管課で作られている。しかし現在私たちが担当するイベント案内等は日本語版のみなので、これらの多言語化については検討したい。

<井上委員>

方策として教える場や活躍できる場の提供が挙げられているが、現在市の関連施設は場所を確保することが難しい状況にある。

<議長>

公民館等の施設がまさにその場となることが期待されるが、施設を具体的な場所として確保することには確かに課題がある。

<小森谷委員>

学習の場の確保、また多様な方々が学習する機会を確保する点の双方において、オンラインやZ o o m等が活用できる。

特にe公民館においてそれらにアプローチして、バリエーションに富んだ情報発信をすると、生涯学習の場として広がりを見せると思う。

<議長>

先程佐藤委員からもI C T活用の意見があったが、Z o o m等はリアルタイムで字幕をつけることもできるので、そのようなツールの活用は学習のハードルを下げる手段となるかもしれない。

<関根委員>

本日の会議に臨むにあたり、東京都港区や横浜市の生涯学習に関わる施策を見てきた。それらも非常によく良くできているので、比較してさいたま市の今後や地域社会の発展について深掘りすると、今回の提言は少々総論的で、上手くまとまっている印象もある。

国内の有力な自治体としてのさいたま市の動きや、今後の方向性を「生涯学習ビジョン」というキーワードをもとに表現すると、もっとさいたま市らしさを出せると思う。

現状でも岩槻の人形や見沼田んぼ等各論としては触れられているが、もう一つ本質的な、さいたま市はこういうまちで、こういう方向を目指すという部分を押し出して

いきたい。

そのために他の自治体との比較でさいたま市の優位性をより引き出し、市民が楽しめる内容を盛り込んだ提言としたい。

<議長>

他の地域との特長の比較や、生涯学習を通じて、皆でさいたま市の魅力を掘り起こしていくことも必要だと感じる。

地元学という取組は各地で行われており、今回の提言でさいたま学のような取組に繋げるのも良いと思う。

<千明委員>

生涯にわたって学び続けることは非常に重要であり、学校教育はその土台づくりになる。

教師としては子どもたちには自ら考え、課題を見つけ、解決策を考え、友達と協力しながら問題を解決することができるようになってほしい。国も同様な方向で様々な施策を行っている。そのため、さいたま市民一人ひとりが生きがいやりがいを持てるような場を創出することが重要である。

学習成果のアウトプットに対して、誰かが評価やコメントをしてくれることが次の活動への原動力になる。評価委員会という形でなくとも、評価してもらえる環境はあると良い。挙げられている関連事業等も、11期の提言とどう関連づいているか、PRすることも必要と思う。また、具体的に何を学ぶのか、学ぶことの意義をさいたま市らしさとして表現できると良い。

<議長>

学校教育もまた生涯学習の一部であり、今回の骨子ではコミュニティ・スクールがあげられていたが、学校との連携は生涯学習において重要な視点である。また、評価やフィードバックも重要な視点であり、この点は現在の骨子には取り込まれていないため、取り入れられると良い。

<溝口委員>

まず、地域の拠点である公民館が、まちづくりの大前提として多世代交流の場となるよう、Wi-Fi等も設置して気軽に立ち寄れる場になってほしい。また、そこから宇宙科学館や岩槻人形博物館等、他の生涯学習の拠点へと人が流れるように、宣伝する動画等を常に流しておくの良いのではないかな。

そしてもう1つ、関連事業にコミュニティ・スクールがあげられていたが、子どもたちがもっと気軽に地域に出て行けるよう、地域全体で取り組んでいくことが必要だと感じた。

<議長>

コミュニティ・スクールとの連携において、子どもたちをどのように位置付ける

か。また公民館を拠点として、科学館、図書館、博物館等、他の施設とのネットワークや繋がりをどのように構築していくかも重要なテーマとなる。

## ② 市民と生涯学習提供者双方に生涯学習ビジョンを理解してもらうための方策

### 【意見・質疑応答】

<議長>

先にも申し上げたように、市民に理解してもらうことは重要だが、同時に生涯学習提供者である公民館等の現場の職員はもちろん、市長部局の職員にも浸透することが大切である。

<佐藤委員>

今回の提案は、どれも非常に素晴らしく、また多くの方策が挙げられており、その充実度は流石だと言える。更に、関連事業も詳細に記載されており、内容が非常に豊富で多岐にわたっていることが印象的である。

しかしながら、市民に理解してもらうことを考えると、多数のプロジェクトがありすぎて、市民が興味を持ったとしても、どれに手をつけたらよいか混乱してしまう可能性がある。そのため、情報を整理しわかりやすく提供することで混乱を避けることができるかもしれない。

<議長>

確かに多様な事業をどのように市民に届けるかは課題である。市民が自ら活用できるよう情報を発信し、マッチングさせなければならない。

現在の取組として情報をどのように届けるかについて、どのような工夫がされているか事務局からお聞きしたい。

<事務局>

まず伝統的な手法として、公民館だより等の紙ベースでの広報があり、市ホームページでも広報を行っている。

図書館、博物館、科学館等の施設は独自のホームページやSNSで情報発信している他、生涯学習に関する市のイベントや団体サークルを網羅する形で、当課で所管する生涯学習情報システムがある。

ただ、市には数多くの施設や部局があり、独自に様々な施策を行っていて、発信方法も豊富にあるため、整理されていない部分もある。

事務局としては、生涯学習情報システムに情報を集約することで整理し、市民が活用しやすい状態にしていきたい。

<林委員>

ここに挙げられた関連事業はもちろん生涯学習を通じたものではあるが、豊かな地域をつくり上げるための「人づくり」、「つながりづくり」、「まちづくり」は部署を横断した、さいたま市全体の共通テーマであることは間違いない。

一方で、アウトプットの場として生涯学習フェスティバルや防災フェスティバル等、やはり分野として細分化される傾向があるので、そこを一緒にやっていく出口をつくれないか。

国籍年齢性別等を問わない多様な方に参画していただければ、当事者でないとわからないような話も聞けて、試行錯誤をしながら取組をつくっていく過程自体も積み重ねとして意義のある事業となるかもしれない

<事務局>

生涯学習ビジョンをつくる際に市長部局を含む検討会議を立ち上げ、内容への意見を募った。

現在も引き続き生涯学習ビジョンを推進するため検討会議は存続しているが、ここ2年の開催はコロナ禍の影響により書面会議となっている。そのため内容が情報提供・情報共有にとどまってしまい、積極的な連携には至らなかった現状がある。

しかし、事務局としても庁内連携は課題として認識しているところであり、来年度の生涯学習フェスティバルはテーマをまちづくりと想定しているので、まずそこから市長部局に働きかけていきたい。

<議長>

今回のワークショップでも市長部局の職員にお越しいただいている。部局を越えて連携をすることは先ほどの情報発信も含めてまちづくり全体として重要なテーマなので、提言に取り入れていきたい。

<副議長>

②の内容だが、生涯学習を理解してもらうための方策や、実現するための方策としてはやや不足を感じる。生涯学習ビジョンを生生涯学習提供者と市民に理解してもらうには、やはり生涯学習ビジョン自体を広報・PRするためにどのようなツール活用するか、どのように情報提供の仕方を工夫するか検討が必要ではないか。

<議長>

ビジョンをどう伝えていくかも考えなければならない。

## イ 総括

議長・副議長より本日の議論の総括を行った。

### 【総括】

<副議長>

今後提言をまとめていくにあたり、私も少々プレッシャーを感じている。

確かに林委員のご意見のとおり、「人づくり」、「つながりづくり」、「まちづくり」は並列ではないので、この循環がわかるように構成していけると良いと思う。

また、関根委員からご意見をいただいたように、最終的に目指す「さいたま市の学習者の姿」や、「さいたま市の地域の姿」を提示して、そのための方策など、道筋を

示せるとわかりやすくなるのではないか。

計画ではないので数値目標を示す必要はないが、やはり実現のための方策を示しているので、提言の中でさいたま市として目指す姿（指標）を示していきたい。

<議長>

はじめに、今回のビジョンの一番大きな目的やはり「まちづくり」にあり、それがビジョンを特徴づけている部分でもあるため、そこはしっかり意識して提言書をつくりたい。

多様なアウトプットを地域の力や「まちづくり」につなげていくという観点や、市民自身が地域のことを掘り下げていく、地域のことを理解して深めていく事業も必要と考えている。

それから最後の方で議論あった情報発信についても、部局の連携を含めて市民に適切な学習情報等を届ける方法については強調していきたい。

今回の骨子であまり言及していない点では、ポストコロナというところは意識した提言書づくりが必要である。ここ数年ではオンライン化やICTの活用が進んだこと等良い面での変化もあり、社会の効率化が進んだ一方で、やはりこの間失われていた対面の関係性は社会教育もずっと大事にしてきたことでもある。

改めてその価値を見直すことは必要だと思うので、その点は大事にしていきたい。情報発信の点でも、単にインターネット等を通じて伝えるだけではなく、いわゆる学習相談として、公民館等で市民と対面でやりとりをしながら必要なサークルや或いは学習機会につなげていくことも大事な機会となる。

そのようにポストコロナを意識した提言書づくりは、心がけていきたい。

#### 4 連絡事項

小森谷委員が参画して実施した市立白幡中学校の防災フィールドワークについて、ご報告いただいた。

#### 5 閉会

以上